はじめに

人間を指す「ホモ・サピエンス（*Homo sapiens*）」とは、「理性ある人」という意味です。しかし、毎日の暗いニュースを見聞きすると、はたして人は本当に理性的であるか疑わしくも思えてきます。

古今東西の文化に「遊び」が普遍的に含まれていることを見抜いて、人間のことを「ホモ・ルーデンス（Homo ludens）」すなわち「遊ぶ人」と名付けたのは、オランダの歴史学者ヨハン・ホイジンガ（Johan Huizinga, 1872－1945）でした。彼の洞察（どうさつ）の根底には、たとえば「スポーツは遊びの内容のうちの最良のものを失ってしまっている」といった鋭い批判精神がありました。

人間の本性（ほんせい）の良さは、理性と遊びを共存できるところにありそうです。実際、人間が作っ

た素晴らしい道具にはさまざまな理知的な工夫が施され、遊びの要素を創造的に発展させることで、知性や感性を極限まで引き出すものでした。たとえば楽器を用いた演奏、カメラとレンズによる撮影、ロードバイクでのロングライドなどがそのよい例でしょう。

ところが、近年になって現れたばかりの電化製品やデジタル機器は、利便性や効率性を重視するあまり、知的な能力を失わせる方向に偏（かたよ）っています。その最たるものが人工知能（ＡＩ）です。人類は先端技術の驕（おご）りと人間軽視の風潮によって思考力や創造力が奪われ、自由な発想すらも機械化されるという危機に直面しています。言語という自由で自立的な個人の創造力を妨げるようなＡＩは不合理であり、それはちょうど言論を統制するのと同じくらい不合理なのです。

本書は、各界の識者との対談を中心に据えながら、紙の本による読書の必要性や「ＡＩ脳クライシス」について深掘りする一つの試みです。このＡＩ脳クライシスとは、「ＡＩ技術の虜（とりこ）になった人の脳が陥るクライシス（危機）」という意味合いです。デジタル機器全般を網羅した解説については、前著『デジタル脳クライシス』（朝日新書）をあわせてお読みください。

時流に乗ることなく、この身近に迫ったクライシスを回避できるかどうかは、読者のみなさんの見識と選択にかかっています。

目次

はじめに　1

第1部　論考　人間とは何か

（第1章）生成AIによって人間は何を失うのか　8

厳しい規制とガイドラインが必須／生成AIの限界
生成AIはカンニングやドーピングと同じ／将棋AIとチャットボットは別物
生成AIのさらなる危険性／「イヌイットの遭難」が教えるもの
生成AIによる文明退化／人間中心の時代との分岐点

コラム　脳は紙の本で創られる　28

紙の本は電子書籍に凌駕される？／言語脳科学とは／読書で想像力を培う
出力はできるだけ豊富に／紙の本と電子書籍では何が違うか

人間の脳が持つ「注意」のメカニズム／便利さと引き換えに退化していく脳
脳は繰り返しによって鍛えられる／脳を創り、人を創るには

（第2章）**言語を生む脳　人間を人間たらしめているもの** 44
複数の言語を習得するほど新たな言語を獲得しやすくなる
人間は「普遍文法」を持って生まれる／多言語と音楽の共通性
子どもの言語獲得／言語の習得に王道無し

コラム **シリアルサーチとパラレルサーチ** 60
シリアルサーチとパラレルサーチの違い／読書体験が想像力を育む

第2部　対談　AI時代をどう生きるか

（第1章）言語脳科学者×将棋棋士
生成AIは人を、頭脳を、思考をどう変えるのか
酒井邦嘉×羽生善治 68
人間の方がAI化していく未来／羽生善治の将棋AIの使い方／AI化の負の側面

言語力を鍛える意外な方法／不気味な「人間の機械化」／収束しないものを感じ取る知性

一手先が見えない世界をどう生きるか

酒井邦嘉×羽生善治 88

運をつかまえる準備／偶然は構えのある心に／ビギナーズラックの視点
運の要素はゼロにはならない／追いたいけれど、追わない

（第2章）言語脳科学者×ブロードキャスター

生成AIは言葉を、音楽を、人間を、どう変えるのか

酒井邦嘉×ピーター・バラカン 102

「王様は裸だ！」／インターネットによる能力低下／機械に感性はない
音楽業界における生成AIの原始版／坂本龍一のマジック
言語能力はたった一度の突然変異で生まれた／AI時代の教育の危機

（第3章）言語脳科学者×日本画家

言葉の理性、芸術の感性は、AIを超える

酒井邦嘉×千住 博 122

芸術は本質的に規格外／芸術に必要な「体験化」／自然と人工物の葛藤

ＡＩ的な発想の原点／「邪魔ものを消す」ことの危険性／数千年後に残るもの

コラム
脳から見た紙の本、電子書籍、オーディオブック 140
紙の本の良さ、電子書籍の使いにくさ／再読のための「書き込み」のすすめ
デジタル化の留意点／マンガのカラー化
もっとオーディブルを／朗読と黙読の違い

（第４章）言語脳科学者×ノンフィクション作家
生成ＡＩに対する「危機管理」を
酒井邦嘉×柳田邦男 154
生成ＡＩの危険性／対話型ＡＩへの依存／スピードアップ主義と一〇〇点主義
「対人間」こそ人を育てる／「危機管理」の観点／民主主義への影響／教育の原点に戻って

コラム
デジタル教科書時代への警鐘 168
学びを支える「紙」の教科書／「合成ＡＩ」がもたらす危機
「人間としての生き方」を取り戻す／ＡＩで得られないこと／教育の価値とは

おわりに 181

第1部

論考

人間とは何か

（第1章）

生成ＡＩによって人間は何を失うのか

厳しい規制とガイドラインが必須

生成ＡＩは、産業革命に比するなどと誇張して宣伝され、二〇二二年十一月に対話型生成ＡＩサービスChatGPTが一般にリリースされて以降、驚くべきスピードで社会に広まりつつあります。

私は言語脳科学者であり、教育にも携（たずさ）わっていますが、現状のチャットボットの技術は大変にリスクが大きく、特に教育では決して使うべきではないと考えています。

現在の生成ＡＩは意味や意図の解析を一切することなく、大規模データベースから確率的、平均的に合成するだけだからです。むしろ「合成ＡＩ」と呼ぶべきで、何かを創造するわけ

ではありません。

さらに大きな問題は、生成ＡＩが共感を装った「対話風」に仕立てられていることで、「適切な問いかけをすれば、うまく答えてくれるだろう」と人が期待し、「正解」を求めるように誘導されるリスクが大きいことです。

正しい答えを返してくれるはずだと期待した時点で、すでにチャットボットの呪縛から逃れられなくなって、自分で物事を考えたり、正しく判断したりできなくなります。

そもそも生成ＡＩとのやり取りは「対話」と呼べるものではありません。生成ＡＩの回答を「ご託宣」のように捉えてしまうと一方的に帰依してしまう危険もあります。

それはちょうど、ドラえもんに頼り切りの「のび太」のようです。ドラえもんは教育的なので、時には突き放したり叱咤激励したりしてくれますが、チャットボットですと容易に泥沼化します。

自己肯定感はもちろん、被害者意識や絶望感までもが際限なく増幅することになるでしょう。実際、生成ＡＩの短期間の使用で自死に至った事例が明らかになっており、われわれの精神や命にとっての脅威にまで直結しています。

「考える前にインターネットで検索する」という文明の退化がすでに始まっていますが、これが生成ＡＩで加速すれば、「チャットボットに頼って自分の頭で考えなくなる」のは必定

です。あらゆる教科や分野で学力と思考力が低下するでしょう。

今や「ＡＩ格差」という差別的な言葉が平然と連呼され、ＡＩを使わないという自由までもが奪われるほどにあおられています。しかし実際には、まったく逆の格差が生じると予想できます。ＡＩに依存して自分の脳を使えなくなる人々と、ＡＩを使わないことで自分の脳を活かせる人々です。

「後戻りはできない」とか「ＡＩとつきあっていく」というほど、なまやさしい問題ではありません。原子力や遺伝子組み換えといった技術と同様に、厳しい規制とガイドラインが必須です。同時に人間の本性を正しく捉えて尊重することが求められています。

生成ＡＩの限界

ＡＩ技術はこれまでも活用されてきました。では、従来のＡＩと生成ＡＩは何が違うのでしょうか。

従来のＡＩは、入力されたデータの特徴や傾向を学習して、類似する別のデータを識別したり、先を予測したりすることが主な用途でした。ChatGPTなどの生成ＡＩは、そうしたＡＩ技術の延長線上にあり、インターネット上などの膨大なデータから条件にかなったもの

を選んで文章や画像などを合成します。先読みの技術で読みやすい文が作れるようになったとはいえ、文の構造や意味を把握しているわけではありません。

多くの人が誤解しているようですが、ＡＩや機械が「考える」ことなど決してありません。新しい組み合わせの文章や画像を合成できるからといって、それだけでは革新的な技術と言えず、そもそも真の「生成」ではないのです。

詳しくは次章で述べますが、アメリカの言語学者ノーム・チョムスキーは、「英語話者が新たな発話を産み出したり理解したり出来る一方、他の新たな列〔筆者注：音素や文字の列〕を英語には属さないものとして退けることが出来るという能力」が人間の本質だと述べています（『統辞構造論』ノーム・チョムスキー著、福井直樹・辻子美保子訳、岩波文庫、二九ページ）。この「英語」は、あらゆる自然言語に置き換えて考えることができます。

生成ＡＩには、「新たな列を英語には属さないものとして退けることが出来るという能力」がありません。構造や意味、そして論理の間違った文章をいくらでも合成してしまいます。ですから、人間のような言語能力や創造性はないと断言できます。創造性には、不要なものを捨て去る能力も必要なのです。

生成ＡＩの文章は、もっともらしく見せかけた文字列にすぎません。いくらやり取りを重ねたところで、それは実際の人間同士の対話や、人間が生み出す創作物とはほど遠いもので

す。

たとえば、「彼のように失敗してはならない」という文を考えてみましょう。はたして「彼」は失敗したのか、失敗していないのか、文字列だけではまったく判定できません。

これは、否定の範囲という構造によって意味が大きく変わる例です。「失敗すること」だけを否定するなら、「(失敗しなかった) 彼のように、『失敗すること』はあってはならない」という意味になります。一方、「彼のように失敗すること」を否定するなら、「『彼のように失敗すること』はあってはならない」となるわけです。

そうしたあいまいな言葉はいくらでもありますから、文脈で判断できなければ話者に真意を確認する必要があります。論理学的に分析するには、「記述理論」による言語分析が必要です。しかし生成ＡＩでは、文法的解析から意味の解析まで、必要な分析システムが搭載されておらず、そうした文章は放置されます。

では、そんなに不完全な技術であるチャットボットとの会話が成立するのはなぜでしょうか。

それは、擬似的に対話風のやり取りだけがＡＩに実装されていても、その足りない部分は人間側がすべて補って都合良く解釈しているからです。会話で相づちを打つように、言ったことを単にオウム返しするだけでも、ある程度は対話しているように見せかけられます。

しかし会話で最も必要なのは、相手の思考に対する推理です。相手がどういう意図で質問をしたのか、本当に聞きたいことは何なのか。生成ＡＩはそうしたことを推測するわけではありません。

外国語について「日常会話くらいはできるようになりたい」と多くの人が言いますが、日常会話ほど難しいものはないのです。実際の会話では常に話題が変わりますし、一つひとつの言葉の意味も、文脈や解釈次第でさまざまに変化します。話し相手によって背景知識や発語傾向も大きく異なります。

文章作成や対話に必須な、構文解析・意味理解・解釈・表現といった言語・思考能力の再現がすべて先送りされていることからも、現時点での生成ＡＩの限界は明らかです。

生成ＡＩはカンニングやドーピングと同じ

生成ＡＩにはこのように大きなリスクがありながら、根強い推進派の意見があるのも確かです。

そうした意見に共通して見られるのは、「新技術を恐れるな」、「禁止しても何も始まらない」、「上手に使いこなした方がよい」といった常套句（じょうとうく）です。

生成ＡＩはマインド・コントロールや洗脳にも悪用される恐れがあり、プロパガンダに使われれば、核兵器やロボット兵器と同様に世界を震撼させるでしょう。それでも「新技術を恐れるな」、「禁止しても何も始まらない」と言えるのでしょうか。

文部科学省から、二〇二三年七月に「初等中等教育段階における生成ＡＩの利用に関する暫定的なガイドライン」が公表され、翌年十二月に「利活用に関するガイドライン」として改正されました。慎重な対応を求めながらも、「資質・能力の育成に向けて適切に生成ＡＩと向き合い、利活用することができるよう」として、積極的な使用が前提とされています。「利用」から「利活用」となったことからも、「活用」を促す内容なのです。

しかし、個人や家庭、そして学校や組織には、どんな道具や技術に対しても使用するかどうかの自由があります。使用を拒否する権利も同時に保障されなくてはなりません。リスクのある技術の積極的な利用を促したり、その活用法を声高に喧伝するのは、明らかに行き過ぎた行為です。

たとえば、このガイドラインにある「生成ＡＩが生成する誤りを含む出力を教材に、その性質や限界に気付く」という「利活用が考えられる例」は、それまでも繰り返し提案されてきたものですが、使用ありきで無理に提案された感が否めません。間違い探しはインターネット上の記事でも十分にできますし、人が作成した文章の方がはるかに教育的でしょう。

教育現場に生成ＡＩを導入することのリスクや、致命的な危険性については、第２部で作家の柳田邦男さんと対話させていただいていますので、詳しくはそちらをお読みいただければと思いますが、教育上はっきりすべきことは、生成ＡＩによる文章作成が、「自らの実力を欺く不正行為」だということです。カンニングやドーピングと同じように、詐称の効果と、相応の副作用を持っているのです。それは、その文章を読む人に対する背信行為でもあります。

生成ＡＩを使う当人は、ＡＩなしでも十分書けるという安易な自負を持ちがちですが、ＡＩに頼るほど、能力向上の機会を失うということは自覚していないでしょう。そうして作文力や言語能力そのものを軽んじるようになれば、誰でも名作が書けるかのような錯覚を生むこととなります。これが作家という仕事の軽視につながることを憂えます。

生成ＡＩの使用を繰り返すことによる思考力の低下も明らかでしょう。それを初等教育から推進しようというのですから、常軌を逸しています。なぜそこまでして害のある技術の活用を暗黙の前提にしながら、使用と開発を推し進めようとするのでしょうか。

先のガイドラインには、「不適切と考えられる例」として、「各種コンクールの作品やレポート・小論文等について、生成ＡＩによる生成物をほぼそのまま自己の成果物として応募・提出する」とあり、「ほぼそのまま」とわざわざ添えてあることに疑問を感じます。多少な

りとも加工してあればそれでよいのかと首を傾げたくなります。

そもそも試験やコンクールで使ってはならない生成ＡＩを、なぜ普段の教室の学習では使ってよいのか理解に苦しみます。高度に発達したカンニング技術も含めて「上手に使いこなした方がよい」とでも言うのでしょうか。

元の「暫定的なガイドライン」とほぼ同時期に、青少年読書感想文全国コンクールを主催する全国学校図書館協議会が「自ら書いた文章の推敲過程で、校正に生成ＡＩを使うことまでは否定しない。これまでも保護者や教員が添削して作品を提出してきた例はあり、それと大きな差はないのでは」との談話を出しました（二〇二三年七月二日、朝日新聞）。

しかし、「校正」といっても、ほとんど書き直しに近い推敲までが含まれます。生成ＡＩの対案を大幅に使いながら、「それも校正の範囲です」とうそぶかれたら、どうするのでしょう。つまり、少しでも生成ＡＩの使用を許容すれば、「何パーセントまでは使ってよい」という線引きができない以上、全面的な容認と何ら変わらなくなります。

また、そうしたカンニングに等しい行為を、他者の手を借りた「軽微な」添削と同一視するなら、作文という創作自体が意義を失うでしょう。文章が多少拙くとも、読書体験を積み重ねて一人で書いた感想文の方が、はるかに尊いことではありませんか。

このようにして生成ＡＩが普及すれば、生徒や学生の実力を正当に評価することが困難に

なります。イギリスのケンブリッジ大学は、いち早く「生成ＡＩの使用は剽窃とみなす」という声明を出して、使用禁止を打ち出しました。そもそも自らが書いた文章でないものを自分の成果物として提出するのですから、盗作や剽窃と等しいことは明らかです。しかし日本の各大学は、残念ながら生成ＡＩの使用を奨励する声明を出し続けています。

これは教育上きわめて深刻な問題です。生成ＡＩの使用が疑われる以上、どれほど優れたレポートも額面どおりには評価できなくなります。さらに、「頑張って自力で書いたところで、どうせ誰も信用してくれない」と学生が思うようになりますから、教員と学生の双方が疑心暗鬼になってしまいます。この事態を恐ろしいとも思わない教員は、はたして教育者なのでしょうか。

将棋ＡＩとチャットボットは別物

生成ＡＩの利用を推奨する意見の中には、将棋のＡＩを引き合いに出して、「プロ棋士が使っているのだから、生成ＡＩだって同じように使えばよい」というものがあります。

しかし、それは明らかな誤解です。詳しくは第２部の羽生善治さんとの対話を読んでいただければと思いますが、囲碁や将棋などのゲームＡＩは、チャットボットとはまったく別物

なのです。ボードゲームには勝ち負けという明白な評価がありますから、現局面から何億手という指し手を調べることで、有力な手をいくつか見つけることができます。

ところが人間の言語や芸術表現に対しては、そうした評価ができません。作品の価値判断にも解釈や好みの余地がありますから、不動の「〇〇点」ということは難しいですし、そもそも厳密な数値化などできない相談です。

むしろ将棋と教育で共通しているのは、ＡＩを対局や試験の本番で使えばカンニングと見なされることです。それなのに「使えばよい」という方向に誘導するのは、多くの事例の中から自説に都合のいい事例のみを提示する「チェリー・ピッキング（cherry picking）」と呼ばれる詭弁（きべん）と同じです。

先ほどの文部科学省による「ガイドライン」では、「利活用が考えられる例」としてさらに奇妙な例が挙げられていました。それは「英会話の相手として活用したり、より自然な英語表現への改善や一人ひとりの興味関心に応じた単語リストや例文リストの作成に活用したりする」というものです。生成ＡＩが「より自然な英語表現」を生むなどというのは、人間の言語能力や外国語を軽んじた誤謬（ごびゅう）です。繰り返し述べてきたように、生成ＡＩには本質的な言語能力が搭載されていませんから、たとえ翻訳や例文リストの作成であっても、単に「それらしいもの」でしかありえません。

生成ＡＩでは本質的な意味での「対話」が成り立たないという危険が、もうすでにわれわれの身近に及んでいます。企業のカスタマーセンターや、自治体の相談サービスで、窓口業務の人手不足解消や効率化を図って、問い合わせに対応する生成ＡＩが次々と導入されています。これは、自動音声よりは「相談」のように思えるかもしれませんが、客や市民に対して「人として」の扱いすら放棄していることに変わりはありません。

もし生成ＡＩではうまく対応できなかった時、それを的確に判断して担当者につなぐことができるかは大いに疑問です。医療相談や教育相談などの窓口で生成ＡＩが使用されたら、たとえば頭部外傷やいじめといった重要な案件が放置されて取り返しがつかない事態を招くかもしれません。そうした時に、「生成ＡＩが初期対応を誤ったためです」などという釈明は誰にもできないのです。

生成ＡＩのさらなる危険性

ChatGPT以降、さまざまな生成ＡＩが登場し、個人で利用する人も増えています。

そうした個人ユーザーの利用法として、生成ＡＩを相手に会話をしたり、悩み事の相談をするといったことも浸透しつつあります。たとえば、生成ＡＩを相手に、「今日は上司にこ

んなことを言われた」と仕事の愚痴をチャットすると、「それはひどい。あなたの上司は間違っています」などと返ってきて、それがストレス解消や癒やしになるのかもしれません。

生成ＡＩは「イエスマン」として振る舞うようにデザインされているため、格好の話し相手になりやすいのですが、それが手放せなくなって依存してしまうと、もはや家族や同僚からの時には厳しい意見に対して、一切耳を貸さなくなってしまう恐れがあります。「生成ＡＩだけが私を理解してくれている」と錯覚して妄想が膨らんでいったら、カウンセラーの介入も受け付けなくなるでしょう。生成ＡＩを搭載した悩み相談のソフトは、両刃の剣です。

対話型アプリ内のＡＩキャラクターを先生にする試みが三田市（兵庫県）などで実施され、生徒にとって「実際の先生より相談しやすい」との報道がありました（二〇二五年一一月二三日、朝日新聞）。不登校の子どもたちの助けになるとの楽観論が述べられていましたが、ＡＩによる「まやかしの共感性」はこの上なく危険です。実際の先生や友達との対話を拒むようになって、不登校や引きこもりの子どもたちがもっと増える危険が予想されます。

海外では、ベルギーの三〇代男性がＡＩのチャットボット「チャイ」と六週間にわたってやり取りを続けたあと、自殺するという事件がありました。その男性は当初、気候変動について問いかけをしていたのですが、やがて「このままでは人類はどうなってしまうのか」という不安が増し、架空の女性「イライザ」に相談するうちに一方的に感情移入をしてしまい、

自死を促(うなが)されてしまったそうです。

この事件はＥＵの欧州議会でも取り上げられ、生成ＡＩの規制を強化する一因になりました。これも生成ＡＩの潜在的な危険を物語っています。常に同意を返してくるだけの標準的な仕様であっても、当人が抱く不安定な感情を増幅させることになりかねません。アメリカでは、短期間のChatGPTの利用で自死に追い込まれた一六歳の少年に対して、ＡＩが遺書の作成を申し出ていたとの事実が明るみに出ました（二〇二五年九月一〇日、朝日新聞）。生成ＡＩの利用を推奨したり導入を推進したりする人たちは、そうした事態の責任を認識しているのでしょうか。

また、生成ＡＩが犯罪に利用される危険性も増しています。

音声や画像、そして映像までが、生成ＡＩによって巧妙に合成できるようになってきました。今や、ある人の肉声の一部を使って、本人がまったく別のことを語っている音声を合成する技術があります。スタントマンなどの代役を立てて、俳優の顔にすげ替えることもできます。そうした加工や生成を簡単に行うアプリが出回れば、誰でも「にわか映画監督」になれそうです。

すると、声紋データや証拠写真、そして防犯カメラの映像までが巧妙にねつ造される可能性が出てきます。そうしたものがひとたび信憑性(しんぴょうせい)を持てば、新たな冤罪(えんざい)が生まれるでしょ

う。その一方で、デジタルデータが犯罪の証拠としての価値を失う可能性もあります。

これまでもさまざまな偽造の技術があったわけですが、今までとは桁違いの詐欺や隠蔽が横行し、それが犯罪組織によって大規模に利用されるかもしれません。

多くの科学技術が正負両面で利用されてきました。先端技術の軍事応用は、すべて例外なく負の利用です。海外では銃の乱射事件があるたびに銃規制について議論がありますが、銃の保有が犯罪の抑止力になるという意見も絶えません。この点は核兵器やロボット兵器も同様ですが、抑止力になるからなどと言って、全体的な危険を顧みないのは道理に反しています。毒ガス兵器から化学兵器、生物兵器、ＡＩを搭載したロボット兵器まで、こうした技術を禁止する以外に人類の未来はありません。

「イヌイットの遭難」が教えるもの

技術の進歩が人間の能力を衰えさせるという事例も直視すべきです。

極北の地に暮らすイヌイットは、伝統的に犬ぞりを使って狩りをしていました。彼らは星や太陽の位置から方角を把握し、雲や風向きから気象の変化を予測して、昔ながらの知恵を生かしながら生きてきたのです。ところが一九九〇年代に入ってから、欧米のセールスマン

がスノーモービルやＧＰＳを売り込み始めました。これらの先端技術は狩りの範囲を飛躍的に拡大させ、効率的な収入増に役立ちました。ところがほどなく、遭難事故が多発するようになったのです。

酷寒の地ではバッテリーの持ちが悪く、ひとたびスノーモービルやＧＰＳが故障してしまえば、致命的な事故につながります。機械に頼るようになってしまった代償として、若いイヌイットたちは、昔から受け継がれてきたサバイバル能力を失ってしまったわけです。

これは、どんなに便利に見える技術でも、安易に広めてはいけないという教訓を私たちに教えてくれます。

小学校から算数の授業に導入されている「電卓」も同じことです。計算の仕方を教える一方で、電卓の「積極的な利用」を進めるのは、明らかな矛盾ではありませんか。児童に電卓を使わせることで、「時間をかけて計算するのは無駄なことだ」と教え込むことになります。同様に授業に生成ＡＩを持ち込むことで、「時間をかけて文章を書くのは無駄なことだ」と教えることになるでしょう。

ただ、数学の学力では、概念の整理や定理の証明といった考え方が重視されますから、筆算が多少苦手でも目立ちません。しかし、文章を書く力がなければ考えたことを言語化できませんから、あらゆる教科に深刻な影響をもたらします。

「電卓を教室で積極的に利用するなら、生成ＡＩも同様にすべきだ」といった議論がまかり通ってはいけません。「筆算」する力と「文章」を書く力を短絡的に同一視するのは、明らかな誤りです。言語能力は、あらゆる学びの基礎にあるのですから。

どんなに便利で作業が効率的になろうとも、「人間が考えなくて済む」ような生成ＡＩは、人間の知的活動にとって脅威ということがお分かりいただけたことと思います。

生成ＡＩによる文明退化

「文は人なり」というように、文章には書く人の個性が表れますが、生成ＡＩを使った場合の個性はどうなるでしょうか。

平均化された結果として、個性やその人らしさは薄れるでしょう。生成ＡＩの利用法講座が盛んに宣伝されていますが、私は違和感を覚えます。生成ＡＩがワープロソフトに搭載されようとも、それは決してワープロの延長ではありません。そもそも、そうした「借り物」の文章を自分の創作の一部とすること自体、倫理的に正当な引用ではないのです。「オリジナルの文章を書く」という意識をなくしてしまえば、すでに述べたように剽窃や盗作に直結してしまいます。

インターネット上の匿名記事やレビューでは、「誰が書いた文章か」という責任の所在がすでに分からなくなっています。そうした風潮に生成ＡＩが拍車をかければ、文章自体に価値がなくなりますし、書き手と読み手の信頼関係も地に落ちるでしょう。悪意ある中傷記事や、愉快犯によるデマが大量に「生成」され、それが興味本位の大衆によって連鎖反応的に拡散されるのです。

それでも信頼のおける発信や創作を守っていくには、どうしたらよいでしょう。新聞記事や小説の最後に「生成ＡＩは一切使用しておりません」という但し書きをして、デジタル署名でも付けましょうか。

絵画や音楽において過去の芸術作品の模倣と改変は、それが芸術家の手によるものならば「オマージュ作品」となりえます。しかし生成ＡＩによる加工は、オリジナルの作意を歪めた形で広めうる破壊行為ですから、何らかの禁止が必要です。

また、「ＡＩが人間のほとんどの営みを代替することは可能になる。それ自体がいけないことではない」といった意見がありますが、人々がその営みに対して「そんな仕事は機械に任せればよい」と線を引くわけですから、代替させること自体が蔑視行為につながることを認識すべきです。

本書の第２部では、ブロードキャスターのピーター・バラカンさんと音楽について、日本

画家の千住博さんと絵画を含めた芸術全般について、生成ＡＩがもたらす深刻な影響について対話をしていますので、詳しくはそちらをお読みください。加工画像や音源が生成ＡＩで安易に作られてインターネット上に氾濫してしまったら、悪貨が良貨を駆逐するように、オリジナル作品の価値や評価を著しく下げてしまいます。

人間中心の時代との分岐点

ＡＩチャットボットChatGPTは、リリースの翌年には一億人超えのユーザーへと世界に広まりました。この二〇二三年は、生成ＡＩによる文明退化が始まった年として後世に記憶され、これまでの人間中心の時代との分岐点となるでしょう。私たちはすでに「ポスト生成ＡＩ」の時代を生きています。

生成ＡＩに頼るあまり、自分の頭で考えること自体を拒否し面倒がる人が続出すれば、教育に限らず社会全体で悲劇的な結果を招きます。そして、効率を追求し、コスパ（コストパフォーマンス）やタイパ（タイムパフォーマンス）を重視して生成ＡＩを使った代償として、人々の思考力や創造力の減退に拍車がかかりますから、貴重な人材をも失うようになって、壊滅的な未来となるでしょう。

生成ＡＩによって人間が失うものはきわめて大きいのです。

近い将来、新たな社会問題や環境問題、そしてパンデミックなどに直面した時、それに打ち克つだけの知力は、もはや人類に残っていないかもしれません。

最も知的な判断が必要とされる医学や研究でも、今や生成ＡＩによる悪影響が現れています。たとえば生成ＡＩの実用本で、「ＡＩを良き『相棒』に、〝最少〟の時間で〝最高〟の論文を書こう」「ChatGPTで患者さん・ご家族向け説明資料をわかりやすく作成したい」「カンファレンスや申し送りにChatGPTを活用し，他部署との連携を円滑化したい」「ChatGPTでアセスメント視点を広げ、より質の高い看護計画に活かしたい」といった言葉が並んでいることに、私は戦慄（せんりつ）を覚えます。患者は、ＡＩで作られた治療・看護の計画や説明を受け入れられるでしょうか。そして、研究結果を合成された文章とデータで発表するのは、研究倫理に反する行為です。実はこの出版社が出している雑誌で、私は一五年にわたり編集委員を務めていましたが、生成ＡＩの使用をあおる事実を知って委員を降り、今後一切その出版物に寄稿しないことで、抗議の意を明らかにしました。

多くの人が生成ＡＩの可能性に対して楽観的に考えていると思います。しかし、ことここに至っては、大きな危機感を持たずにはいられません。私は一人の科学者として、生成ＡＩといった技術を妄信することがないようにと啓発する必要性を強く感じています。

AI脳クライシス

デジタルは人から何を奪うのか

酒井邦嘉 編著
羽生善治／ピーター・バラカン／千住 博／柳田邦男

発　行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定　価：1,760 円 (10％税込)
発売日：2026 年 5 月 11 日
ＩＳＢＮ：978-4-7976-7477-4

ネット書店でのご予約･ご注文は こちらからどうぞ！